



OCNet 25周年記念勉強会 第3回に参加して

大田区中国帰国者センタースタッフ 石田 由美子

OCNet 創立25周年記念勉強会第3回（満蒙開拓団と中国帰国者）が6月24日に開催され参加しました。会場は、池上本門寺の脇にある池上会館でとても静かで気持ちの良い場所でした。会場の教室も大勢の人たちで埋まりました。

第一部は大田区中国帰国者センターで活躍している下郷晃氏の講演でした。なぜ、どのように満蒙開拓団が派遣されたのか。そして開拓団員の逃避行や集団自決がどのような経過で始まったのか。さらに日本への引き上げが遅れたこと。残留孤児や残留婦人が発生したことなどを、歴史を追いながら懇切丁寧に話してくださいました。

1972年日中国交正常化以降、残留孤児による肉親捜しなどが始まったものの、帰国しても苦しい生活があり、国家賠償訴訟などを経て、現在では一時帰国後の援護、永住帰国援護、定着・自立援護制度がある事などの説明がありました。また、国は、1984年、帰国直後に基礎的日本語や生活習慣などの集中研修を行う施設の設立を決め「中国帰国孤児定着促進センター」を開設、2001年11月「中国帰国者支援・交流センター」が全国で7か所開設されているとのことでした。OCNetの運営する「大田区中国帰国者センター」は大田区の委託を受けています。話を聞いてまず驚いたのは、1945年8月現在に「中国残留婦人」が13歳以上の女性だということです。現在なら13歳はまだ中学1年生の年齢です。今なら、児童福祉法の下で守られている年齢です。

逃避行をしていた時の悲惨な様子もいろいろな資料を基にお話しされました。

講義の後、DVD「二つの祖国の狭間で」を見ました。DVDの中で、紹介された残留婦人のことも胸を打つものでした。何ととっても、牡丹江を渡るときに、「首まで水につかりながら、お互い手を取り合って渡った。年寄・子どもは流されてしまうからと残った。子どもが流されたが、誰も助けられない。大きなリュックにお金をいっぱい入れた人も流された。」とありました。これまで似たような話を何度も聞いています。それでも聞くたびに辛くなります。残留婦人の「戦争さえなかったら、こんなひどい目に合わなくてよかったのに」とつぶやきも心に残りました。

当日配布されたものの中に資料のコピーが沢山ありましたが、その中の一つに「数十年の歳月をかけて中国人、朝鮮人民によって切り開かれ、そこから強制的に追い立てられた人々の怨嗟の念のこもった土地、それこそが日本の農民や中小工業の整理統合による転業者、満蒙開拓団の少年義勇隊などに提供された『希望の大地』『新天地』に他ならない」とありました。

そんなことの後に、残留孤児を自分の子どもとして育て愛してくれた中国の人たちがいたということをお忘れしてはならないと思います。こんな苦しみを、これから経験しなくて済むにはどうしたらいいのかということをお考えさせられる勉強会でした。

2018年6月9日と10日の2日間、移住連ワークショップが札幌市の北星学園大学にて開催されました。OCNetからは理事の西尾が参加しました。ここにその報告をさせていただきます。

①開会のあいさつ

冒頭では、本ワークショップ札幌実行委員会の共同代表、古賀清敬北星学園大学教授と加藤丈晴弁護士のご挨拶がありました。北海道は幕末以降内地からの移住者によって開拓された結果、アイヌ他、北方の先住民族が迫害されて現在に至るまで差別とマイノリティの問題が継続していること、サハリンの残留邦人とその家族を多く受け入れていることなどから、移住の歴史が凝縮した地と言えます。そのため、本ワークショップを開催してマイノリティに対する排外主義や差別、さらに多様性を考える強い意義があると語られました。さらに、現在「ダイバーシティ」という言葉が多用されているが、マジョリティの視点から見て都合のいい「多様性」ではなく本当の意味での「多様性」を考えるべきであるという指摘も壇上でいただきました。

②特別講演

「排外主義を克服するために体験的アジア交流論」韓国カトリック大学客員教授・元朝日新聞記者 植村隆氏

本講演の講師の植村隆氏は、朝日新聞勤務時代の1991年韓国での取材に基づき「女子挺身隊」と称された女性たちが性奴隷になっていたという内容の記事を書き、その記事をきっかけに日本国内で慰安婦問題が周知され、かつての慰安婦が国家補償を求めて提訴するに至りました。

時を経た2014年ある雑誌に植村氏がかつて書いた慰安婦に関する記事が「捏造記事」であったと掲載されたことをきっかけに、「売国奴」などの言葉で植村氏に対する激しい誹謗中傷と脅迫が始まりました。当時植村氏を教員として招聘する予定だった大学は被害を恐れて招聘を白紙に戻しました。その後、植村氏は北星学園大学に非常勤講師として赴任しましたが、大学宛に数多くの卑劣な中傷の手紙や脅迫状が送り付けられ

るようになりました。それらの中には、植村氏ばかりか当時高校生だった氏の長女や在学する学生に対しても殺害を予告したり、大学の爆破を予告するものもありました。

北星学園大学の当局は危険を避けるため、植村氏の任期更新を拒否しようとしたのですが、教職員や外部の人たちが結束して、思想、言論、学問の自由を脅かす様々な圧力に対して断固として闘う運動を続け、植村氏は継続して任用されることになりました。そして、植村氏が招聘を受けて韓国の大学に赴任したことをきっかけに誹謗中傷と脅迫は終息を迎えました。

現在も名誉棄損についての訴訟を継続している植村氏は、一連のバッシングの根幹は、「歴史修正主義」「アジアに対する排外主義」にあると定義付けます。それに加え、一連の偏狭的、差別的、攻撃的な言動によって日本の民主主義の根幹が崩れる恐れがあることも、私たちは決して忘れてはならないと感じました。

③分科会

ワークショップでの分科会は、「労働」「技能実習」「移住女性・貧困」「入管・難民・収容」「地域社会」「子ども・若者」「医療・福祉・社会保障」「人種差別・ヘイトスピーチ」の8つのテーマに分かれていて、参加者が興味のあるテーマの報告会に参加するようになっていました。

私は「子ども・若者」の報告会に参加しました。OCNetが毎年主催している高校進学ガイダンスの全国主催者交流会による報告や、桐生いじめ自死問題、在留資格によって外国籍の若者たちの進路が阻まれる問題、札幌における外国につながる子どもたちの状況、アイヌ民族に関する教育政策の現状と希望について報告が行われました。その中の、開催地の札幌の方々のご報告を紹介します。

札幌は全国的には外国人の集住地区ではありませんが、華僑居住の歴史や、サハリンの残留邦人一世の方とそこご家族の引揚げなど、多様なエスニックグラウンドを持っています。サハリンで残留を余儀なくされた日本人女性の中には朝鮮半島から強制連行されて同じく残留した男性と

結婚したケースも多く、現在の引揚定住家族も、日本、ロシア、朝鮮半島など複数の国・地域にルーツを持っている特徴があります。従って、日本語支援の他、ロシア、朝鮮半島、中国などの言語や文化の継承活動が行われています。

また、先住民族であるアイヌにルーツを持つ方々による報告では、自民族のアイデンティティを持続するための、文化、言語、歴史の啓蒙活動が紹介されました。現在アイヌ語は、ユネスコより極めて深刻な消滅危機にある言語だと報告されています。自民族言語や文化の継承と共に、地球規模の貴重な文化財産を残すという観点からアイヌ語やアイヌ文化を守る取り組みを行うことが重要ではないかと感じました。

報告後の情報交換では、各都道府県間における進路ガイダンスや日本語教室など外国にルーツを持つ子ども・若者に対する行政の支援や、各支援組織の規模の格差が浮き彫りになりました。

④全体会

二日目は前日の分科会の各テーマで行われた報告や情報交換で議論した内容を、各分科会の代表が発表しました。私が参加した「子ども・若者」の会では、ME-net(NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ)の高橋代表が、前日のテーマ報告の内容の他、議論となった地域間で外国にルーツにある子どもへの教育支援や、課題達成に

格差がある現状を報告しました。今後の課題として、①日本で生き抜く力と、学びと進路の保障、②母文化継承の保障、③反差別的な多文化共生教育の3点を挙げました。

また、「私たちが目指す10の目標」をテーマに、移住者に対する人権や安全を保護し、持続可能な開発と移住者の関連を強め、移住者の貢献をより拡大することについて討議を行いました。

さらに、新制度として導入することになった「特定技能」在留資格の紹介とその課題と問題点も討議されました。

最後に、事実上の移民社会化を否定しようとする日本政府に対し、「移民」の存在は身近であることを訴え、移民・マイノリティに権利と尊厳を求め、多様性の尊重や反差別、貧困の解消、民主主義を基本に考える内容の政策提言をこれからも行っていくことを確認して、ワークショップは終了しました。

来年は、移住連全国フォーラムが6月1日、2日の2日間に渡って東京で開催されます。ぜひOCNetの皆さんも参加して、今後も増加しつつある外国人移住者の方々と共に生きる立場としての政策提言に協力していただきたいと思います。

活動報告

■東京南部多言語高校進学ガイダンス

例年どおりレガートおおた、IWC、多文化教育研究会と協力して夏と秋の2回開催しました。

① 7月16日 品川会場 (品川区立中小企業センター)

参加者 44人 23家族

② 10月14日 大田会場 (都立六郷工科高校)

参加者 35人 18家族

*大田会場のガイダンスの様子は、ケーブルテレビj-comで放映されました。(葵 佐代子)

■大田区平和都市宣言記念事業「花火の祭典」

8月15日(水)

六郷土手にて平和の祭典“花火”が行われました。昨年は雨で中止となったので、今年は昨年よりの多くの花火が打ち上げられ、とても美しく迫力のある花火に大きな歓声が上がっていました。OCNetは早めに場所を確保し、スタッフ・学習者・学習者の家族や友達など40名が参加し大きなブルーシート3枚の上で、食べ物や飲み物を飲みながら楽しい時間を過ごしました。

(天明 尚子)

■OCNet 多言語無料相談会

9月8日（土）

東京都国際交流委員会が事務局となって毎年開催している「外国人のためのリレー専門家相談会」の一環として、多文化共生推進センター「教室」で実施しました。当日は弁護士、行政書士、OCNetの相談担当が相談を受けました。相談者は4人と少なかったので一人ひとりじっくり相談ができました。

内容は、在留資格、離婚・夫婦関係のほか、交通事故による相手方との交渉をどうしたらよいかなど、難しい内容の相談でした。

（葵 佐代子）



8月15日花火の祭典の様子

◆今後の予定

11月

17日（土）第11回 蓮沼ふれあい祭り

18日（日）大田区中国帰国者センター祭り

25日（日）日本語でスピーチ

12月

9日（日）忘年会

発行・発行／一般社団法人 OCNet

URL: <http://www.ocnet.jp>

住所: 〒144-0051 東京都大田区西蒲田 6-36-14 TTK マンション 1F

Address: 1F, 6-36-14 Nishikamata, Ota-ku, Tokyo, 144-0051

TEL&FAX: 03-3730-0556 E-mail: jimukyoku@ocnet.jp